

きもの 着物

日本人が日常的に^{にちじょうてき}着ているのはほとんど洋服であるにも関わらず、^{かか}今もなお、着物は日本人に愛され続けています。特別な^{とくべつ}儀式やパーティーなどの^{ざい}際に、または特定の^{とくてい}職業の人たちが^{しょくぎょう}着物を^{ちゃくよう}着用することがあります。着物は四季のある日本の^{しき}気候に^{きこう}適し、日本人の^{てき}顔立ちや^{かおだ}体型にもよく映る^{たいけい}ように^{うつ}進化し^{しんか}続けてきました。

着物は^{へいあんじだい}平安時代まで^{さかのぼ}遡る日本の^{でんとうてき}伝統的な^{いしゅう}衣装であり、^{しゅるい}様々な種類があります。種類によって着用シーンが決まっているので、美しく着こなすためには、その場に合った着物を選ぶ^{ひつよう}必要があります。結婚式や披露宴などで着る^{けっこんしき}フォーマルな^{ひろうえん}着物には黒留袖^{くろとめそで}、色留袖^{いろとめそで}、振袖^{ふりそで}などがあります。裾だけに^{すそ}模様が入っている^{もよう}黒地の留袖は、背・両袖・両胸の^せ五箇所^{りょうそで}に^{りょうむね}紋が入っており、^{ごかしよ}最も^{もん}格が高い^{もっと}既婚女性^{かく}の^{きこん}第一^{だいいちれいそう}礼装とされています。色留袖は裾だけに^{もよう}模様が入る^{いろじ}色地の着物で、五つ、三つ、一つと紋の数によってフォーマル度が変わりますが、既婚と^{みこん}未婚に関わらず着用できます。振袖は袖丈が長いのが^{そでたけ}特徴で、^{とくちょう}全身に^{ぜんしん}華やかな^{ほどこ}模様が施されており、未婚女性の第一礼装に位置する着物です。他には、^{かた}肩・^{むね}胸・^{そで}袖・^{はかば}裾に^{ほうもんぎ}模様が入った訪問着という^{りゃくれいそう}略礼装があり、^{にゅうがくしき}入学式や^{そつぎょうしき}卒業式、^{かんげき}フォーマルな^{はばひろ}パーティーや^{かんげき}観劇など幅広い^{はばひろ}場面に着ていけます。三月の卒業シーズンの^{ふうぶつし}風物詩になっているのが^{そつぎょうはかま}卒業袴を身にまとった^{すがた}学生の姿です。夏のお祭りや花火大会でよく見かけるのは、^{きど}気取らない場所でのみ着ることができる^{ゆかた}浴衣です。着物だけではなく、^{おび}帯にも^{むす}種類や^{かた}格、^{むす}結び方がいろいろあり、^{てきせつ}場面に合わせて適切に選ぶ必要があります。男性の着物の第一礼装は^{くろもんつき}黒紋付に^{はおり}袴と^{はおり}羽織です。着物と羽織にそれぞれ五つ紋が付き、フォーマルな場で着用します。

着物の^{きじ}生地には^{きぬ}絹、^{もめん}木綿、^{そざい}デニムなどと^{そざい}色々な素材があります。格の高い着物は主に^{おも}絹が^{しょう}使用され、^そ生地の^お染め方は^お織り上がった^{がら}白い生地に^{がら}後から色や柄を染める「^{あとぞ}後染め」^{もち}が用いられます。カジュアルな着物は^{いと}糸に^{いろづ}色付けしてから^{いと}織り上げる

「先染め」が多いようです。着物の模様は全く同じものがないと思えるほど多く、
例えば、長寿を願う鶴、鳳凰、松竹梅などの柄付けは縁起が良く、お祝いの席で好
まれます。他にも季節が反映された植物や花の柄、扇や短冊などを使った古典的な
柄など多種多様です。近年、グローバル化が進むにつれて、洋風の柄を取り入れた
着物や海外のデザイナーとのコラボレーションによるデザインも増えているようで
す。今、世界中で着物の認知度が高まりつつあり、日本関係の催し事で着物を着る
外国人を見かけることも珍しくありません。しかし、着物についての知識が必ずし
も浸透しているわけではなく、着物の左衿が必ず上に来るように着付けをしなければ
ならないという決まりが分からず、その逆の死装束を身につけてしまった失敗談
を持つ人もいます。着物の世界は大変奥が深く、せっかくの美しい着物が台
無しにならないように気をつけたいものです。

着物は今後、更にどんな進化を遂げるか期待すると同時に、日本の伝統も保ち
続けてくれることを願って止みません。